

食と農を結ぶ協同組合*



長谷川 晃生

本書は、農漁協と生協が企業との競争が強まる中で、現在どのような役割を果たしているのか、また果たさなければならぬのかについて事例を通じて明らかにしようとしている。吉田寛一氏、渡辺基氏、大木れい子氏、西山泰男氏が編著者となり、協同組合運動に献身されている方々合わせて 12 名が執筆している。以下、内容について紹介することにした。

まず協同組合の本質と存在価値について論じている。協同組合は、資本主義経済のルールの中で労働者、小生産者、中小企業者等の生活を擁護する事業体、また運動体でもあり、非資本家階級にとって不可欠の存在であるとしている。環境保全、国内食料自給率を高めるためには農業の発展なくしては不可能であり、農協と生協との連携が不可欠の条件であるとしている。

協同組合の本質、存在価値を踏まえた上で、6 農協（みやぎ登米農協、野辺地町農協、西和賀農協、三ヶ日町農協、大内山酪農協、紀ノ川農協）、岩手県漁連、県内漁協、2 生協（みやぎ生協、共立社）の事例を取り上げている。

近年、一部の大規模米農家は米の直売等を行っており、農協の米集荷力は低下しつつある。農協の経済事業の衰退は信用事業、共済事業に響き、農協経営の破綻に繋がって行くとしている。これが現在進められている広域農協合併の背景にあり、追いつきをかけるのが農協からの信用事業の分離の議論であると主張する。こうした流れを転換し、再び農協への結集をはかろうとする動きとして、広域合併農協であるみやぎ登米農協を取り上げて

いる。米生産地の農協運動再生にとって、全組合員農家を結集し、安全性の追求によって、消費者との連携を作っていくことが重要であるとしている。

野辺地町農協、西和賀農協、三ヶ日町農協は、米を基幹作物とし、複合経営の一部門として取り入れた果樹、家畜、花卉、野菜の販売に注力し、成果を挙げている事例として取り上げている。また紀ノ川農協では、無農薬栽培を基本にした安全性についての厳しい規制を組合員に課し、遵守させている。こうした農産物に対する消費者の信頼性の高さが農協経営の健全性を支えているとしている。大内山酪農協の酪農家は農協を通じ、市価より高い乳価を実現している。産直は全国で数多く取組まれているが、単なる商品流通の形態であるだけでなく、生産者と消費者との交流を通じ、信頼関係をつくり、食料生産のあり方と食に対する正しい認識をお互い持つところに意義があると主張している。漁協の事例として岩手県漁連、県内漁協を取り上げている。沿岸魚場の環境保全に対して、県漁連が中核となり、県下各漁協と共同連帯して取り組んでいる。

みやぎ生協では、生協が食品の安全について長い間取り組み、農家・農協との産直によって低農薬の生鮮食品の普及に力を尽くしてきた。また 2000 年以降、生協店舗内で生産者が値付けし、残品は持ち帰るやり方を導入している。こうしたやり方は、農家の農業への意欲を引き出し、地域農業の活性化に貢献しているという。最後に共立社を取り上げている。地域の農家・農協との提携、産直に止まらず、県外他生協への地場産品の斡旋、地域医療生協との連携による高齢者福祉活動等地域経済・社会の自立に向けた取り組みを行っている。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきたが、協同組合のあり方を考える上で、貴重な研究成果であり、是非一読をお薦めしたい。

* 吉田寛一・渡辺基・大木れい子・西山泰男編『食と農を結ぶ協同組合』、筑波書房（2006.6）。